

[研究ノート]

アメリカ合衆国における「近代的セクシュアリティ」の 形成をめぐる歴史研究動向 ——「行為」から「アイデンティティ」へ?——

箕輪 理美

1 はじめに

ゲイ・レズビアン解放運動が高まりを見せた1970年代初頭以後、アメリカでは現在に至るまでセクシュアリティの歴史研究は着実に拡大し、質の高い研究を多く生み出してきた。最も初期の研究がそれまで隠されてきた「同性愛者」の歴史を掘り起こすことを主な目的としていたのに対し、1980年代以降の研究は、この「同性愛者」(及び「異性愛者」)というカテゴリーの歴史性を明らかにした。そこで強調されたのは、性行為に付与される意味は生物学的に決定されるのではなく、歴史的・文化的に構築されるということである。

こうしたセクシュアリティ研究の多くは、理論面においてミシェル・フーコーの著作に多大な影響を受けている。フーコーの主張の中でも特に影響力を持ったのは、性的アイデンティティという概念が実は歴史的に見てかなり近年に形成された構築物であるという議論である。フーコーは『性の歴史Ⅰ——知への意志』(1976年、英語訳初版は1978年)で、近代西洋社会において起こったある変化について次のように語った。

同性愛は、それが男色(ソドミー)の実践から、一種の内的な半陰陽、魂の両性具有へと変更させられた時に、性的欲望(セクシュアリティ)の様々な形象の一つとして立ち現われることになったのである。かつて男色家(ソドミスト)は性懲りもない異端者であった。今や同性愛者は一つの種族なのである⁽¹⁾。

以後繰り返し引用されることになるこの有名な一節は、近代において同性間の性行為や欲望に付与される意味が禁じられた「行為」から個人の「アイデンティティ」へ転換したことを意味するものとして定説化し、後続の研究者による活発な議論をもたらした⁽²⁾。アメリカ史研究者は、この性的アイデンティティという概念が「近代的セクシュアリティ」を構成する重要な指標であると思なしたうえで、アメリカでは具体的にはいつごろ、どのような状況下で同性間の性行為がホモセクシュアリティとして認識されるようになったのかという問題に大きな関心を向けてきた。しかし、ごく最近の研究の中には、そのような決定的な性認識の転換がそもそも実際に起こったのかという点に疑問を呈するものが現れている。

本稿は、アメリカ合衆国における近代的セクシュアリティを扱った歴史研究の動向を概観することを目的としている。限られたページの中でこの分野の膨大な量の研究を包括的に扱うことはできないが、本稿の論点を例証するような代表的研究を紹介するよう心がけた。まず注目すべき

なのは、同性間の性行為や欲望をアイデンティティの表出と見なす態度は近代的性システムを特徴づけるものではあるが、その際の「ホモセクシュアリティ」の定義がジェンダー逸脱から同性への性的志向に移行したことがさらに決定的な変化であるというコンセンサスが形成されてきた点である。しかし、2000年代以降に現れた研究が論証したように、こうした前近代から近代へのいわゆる「転換」は現実には不完全なものである。本稿はこのような動向を踏まえ、「近代的セクシュアリティ」についての今後の歴史研究の方向性に関して一考察を加える。

2 近代的セクシュアリティの形成をめぐる『「行為」対「アイデンティティ」』パラダイム

第2波フェミニズムの影響を受け、アメリカでは1960年代後半から1970年代にかけて女性史が急速に発展していくが、近代的セクシュアリティ形成以前の時代には現在とは異なる性システムが人々の感情や行動を規定していたことを最初に論じたのはこうした女性史研究だった。1970年代、キャロル・スミス＝ローゼンバーグやナンシー・コットの女性史研究者は、18世紀末から19世紀における白人中産階級の女性同士の友情に注目した。性別役割による差異化・社会化によって特徴付けられたヴィクトリア期の社会において、女性間のロマンティックな友情は社会的に好ましいと考えられており、女性としての社会的責務や結婚と十分に両立するものだった。女性は教育、妊娠、出産、育児、更年期等の共通の経験を通して他の女性と深く関わり、男性との結婚に勝るとも劣らないような密接で時に情熱的な関係を築いた⁽³⁾。また、労働者階級の白人女性、黒人女性の間でも同様の友情が見られたことが近年の研究で明らかにされている⁽⁴⁾。

他方、19世紀において男性同士の性交渉は「ソドミー」や「自然に反する犯罪」と名指され、刑罰の対象となった。しかし、ジョナサン・ネッド・カッツが論じたように、肉体的欲望とは区別された男性同士の精神的愛情は、女性の場合と同様に社会的に是認されていた。また、ソドミーにはペニスの挿入が必ず伴うと認識されていたため、19世紀の大半の期間においては、相互のマスターベーションやオーラル・セックスを含む数多くの行為は、制定法上の規定外であるという点では許容される性行為の領域をなしていた。そして、この基準から言うと、女性同士がどのような行為を行なっていようともそれはソドミーとは捉えられなかったとも言える⁽⁵⁾。

まとめて見ると、これらの研究はホモ／ヘテロという現代のカテゴリーの普遍性を否定し、19世紀には二者間の境界はより柔軟で曖昧だったことを示している。ヴィクトリア期の社会は一般的に性に関して厳格で抑圧的だったと描かれることが多いが、同性間の精神的な親密さや様々な形でのエロティシズムを許容していたという点においては、20世紀のアメリカ社会よりも寛容だったと言うこともできるだろう。同様に重要なのは、19世紀において、同性愛的行為を行う男女は同一のカテゴリーに分類されるとは必ずしも考えられていなかったことである。

現在とは異なる性認識が少なくとも19世紀までは存在していたのだとすると、性的アイデンティティという概念はいつ、どのような状況で出現したのだろうか。フーコーのセクシュアリティ論以後、ゲイ・レズビアン史研究は「同性愛者」が主体として社会的に構築される歴史的過程を描くことにより、この問いに取り組んできた。これらの歴史研究はフーコーが論じたような19世紀後半に登場した医学的言説の役割を重要視しつつも、医学や性科学の領域で同性愛者という概念が現れたことは文化全体において同性愛者が登場したことを即座に意味しないこともまた示唆

した。

ジョン・デミリオの *Sexual Politics, Sexual Communities* (1983年) は先駆的かつ現在では古典となっている著作である。デミリオはの中で、アメリカでは20世紀転換期前後に加速化した都市化・産業化に伴い、同性に性的魅力を感じる男女が大都市において独自のアイデンティティと生活スタイルを形成し始めたと指摘する一方、同時期に現れた医学的モデルがゲイ・アイデンティティの構築を極めて重要な方法で促進したと述べている。医師や性科学者の精査のもとに、同性愛は処罰の対象となる（しかし誰もが犯す可能性のある）逸脱行為から個人の内に埋め込まれた生まれつきの病理へと転換し、このことが性的欲望に基づく新たなアイデンティティの構築を促進した。ただし、この医学的モデルの影響力は1940年代までは限定的であり、一般的なレベルでの同性愛理解にはあまり浸透していなかったという。デミリオによると、こうした状況に変化がもたらされる契機になったのは、第2次世界大戦の勃発だった。まず、戦時に徴兵男性に対して精神科医による同性愛者のスクリーニングが行われたことは、医学的モデルとしてのホモセクシュアリティがアメリカ人一般に広く認識されるきっかけとなった。さらに、何百万人もの人々が軍隊や防衛産業のために海外や大きな港湾都市にある、主に性別に分離された、非家族的環境に置かれた。その結果、多くの同性愛者が自分と同じような他者を発見し、コミュニティを作り出し、戦後のゲイ解放運動の基盤となるようなマイノリティ・グループとしての集合的アイデンティティを形成していった⁽⁶⁾。

デミリオが全米レベルでの考察を行ったのに対し、その後の研究はアメリカ各地の特定のゲイ・コミュニティに注目したものが数多く現れた。これらのコミュニティ研究で明らかにされたのは、性認識の転換の仕方には地域・階級・人種・性別等によって差異が見られたということである。例えば、ジョージ・チョンシーの1994年の研究は20世紀初頭のNY市で興隆したゲイ男性のコミュニティを扱っている。チョンシーが指摘しているのは、労働者階級中心のサブカルチャーの中では、20世紀に入ってしばらくしてからもホモ／ヘテロセクシュアリティという二項対立はまだ影響力を持っていなかったという点である。男性たちは、性的パートナーの性別というよりは彼ら自身の男性性や女性性に基づいて定義されており、男らしい水夫や肉体労働者などが女性的だとされた「フェアリー」と性行為を行っても、彼らが能動的役割を担う限りは「ゲイ」であるとはみなされなかったのである⁽⁷⁾。また、ピーター・ボアグによる2003年の著作はオレゴン州ポートランドを中心とした大西洋沿岸の北西部に焦点を当て、この地方の伐木業者のキャンプ施設や下宿屋などで男性労働者が発展させたサブカルチャーを描いている。このサブカルチャーの中では、能動的役割の年長者と受動的役割の少年の間の性交渉のパターンに見られるように、ジェンダーと言うよりは年齢によるヒエラルキーに基づいた役割分担が行われた。北西部社会はこうした男性間の性行為を認識し懸念していたものの、不道德な移民や労働者階級が行う「墮落した」習慣であると認識し、個人のアイデンティティと結びつけることはなかった⁽⁸⁾。

こうした男性同士のサブカルチャーが労働者階級中心の世界だったのに対し、近代的な「同性愛者」が最初に現れたのは中産階級の中からだだったとチョンシーとボアグは共に論じている。北西部社会において「同性愛」という概念が一般的に認識されるようになったのは、1912年にポートランドでのセックス・スキャンダルが大々的に報じられたことで、白人中産階級および上流階級が自分たちの中に同性愛行為を継続的に行なっている男性がいるということに気づいてからだった。この騒動以降、同性愛行為は単なる不道德な行為というよりは生まれながらのアイデン

ティティに由来するものとして概念化されるようになっていったという。一方、NYの都市文化の中で「フェアリー」になることは女性と同等と見なされること、さらには売春婦の地位に置かれることを意味する可能性があった。そのため、労働者階級のフェアリーと自らを区別するために、中産階級男性は1910～20年代の時期に、同性に惹かれることによって定義される「クィア」という新たなアイデンティティを作り出した。しかし、クィア男性が同性への性的志向に基づいて自己定義を始めると、それ以外の「正常な」男性は同性愛の印となるようなあらゆる感情や行動との関わりを拒否することによってクィアとの違いを強調するようになった。言い換えると、規範的な男らしさが同性愛的要素を切り捨て、異性愛化されていったのである。このことが、同性愛の対となる異性愛の構築をも同時に促したという⁽⁹⁾。

このようなホモ／ヘテロの二項対立の構築への注目には、1990年代以降のクィア理論からの影響が見て取れる。イヴ・コゾフスキー・セジウィックの『男同士の絆』（1985年）、ジュディス・バトラーの『ジェンダー・トラブル』（1990年）等の出版によって盛り上がりを見せたクィア理論は、異性愛規範は常に対立項である同性愛の排除に依拠してのみ成り立っていることを明らかにしたが、このホモ／ヘテロ間の境界のダイナミズムという視点はセクシュアリティの歴史学にも影響を与えている⁽¹⁰⁾。

コミュニティ研究はレズビアン史についても盛んに行われている。エリザベス・L・ケネディとマデリーン・デイヴィスは、1940～50年代ニューヨーク州バッファローにおける労働者階級女性の文化を論じた。女性たちは、酒場を中心としたサブカルチャーを作り出し、ブッチ（男役）／フェム（女役）役割に基づくジェンダー化された関係性を築いた。著者たちが調査した20年間のうち、初期の「レズビアン」という自己認識の中心になっていたのはジェンダー倒錯、つまり女性でありながら「男らしい」という内的感覚だったが、1950年代末までには同性に性的魅力を感じるものが支配的な定義となり、ブッチだけではなくフェム側の女性をも含む包括的なカテゴリーとなったという⁽¹¹⁾。こうしたアイデンティティの変化が20世紀半ばに起こったことを考えると、女性のホモセクシュアリティ概念は男性に比べるとやや遅れて普及した可能性がある。

近代的セクシュアリティの形成においては国家もまた重要な役割を果たした。マーゴット・カナデイによると、1900年から1940年代にかけてアメリカの国家官僚制度の後発的発展とともに、かつて曖昧だった同性愛者排除の政策は徐々に一貫性のあるものとなっていったという。その結果、戦後、性的志向に基づくホモ／ヘテロの二項対立が軍隊・福祉・移民などにおける国家統制の判断基準となり、この二項対立に基づいた同性愛理解がアメリカ社会全体に普及していった。また、連邦政府は20世紀前半までは女性同性愛者に無関心に近かったが、戦後に女性が軍隊などの制度に市民として組み込まれるようになるに従い、レズビアンの取り締まりにも大きな関心を向けるようになった⁽¹²⁾。さらに、まだ数が少ないものの、レベッカ・L・デイヴィスの著書のような、ホモ／ヘテロの境界の構築・維持における教会の役割を扱った研究も現れてきている⁽¹³⁾。

以上に見てきたように、近代的な性システムへの転換は同性間のセックスの意味が「行為」から「アイデンティティ」へと変化することを伴ったが、変化はそれだけではなかった。近代性のもう一つの大きな特徴は、ジェンダーではなくセクシュアリティに差異の重点を置くということにある（そしてこの変化は「行為からアイデンティティへ」の変化より後の時期に起こったと考えられる）。前近代的な性文化においては、同性への性的欲望は様々なタイプがあり、それらはジェ

ンダー規範からの逸脱として理解されることが多かった。例えば、少年愛好者や能動的立場のソドマイトは男性性の抑制の欠如や性的過剰の文脈で語られた一方で、受動的役割の男性は女性性によって特徴付けられ、前者と後者の問題は別種のものであった⁽¹⁴⁾。19世紀末の性科学者が、同性に性的に惹かれることを意味する包括的用語として「ホモセクシュアリティ」を使い始めたものの、この新たな概念が一般社会で受け入れられるまでには時間がかかった⁽¹⁵⁾。そして、多くの場合、性科学者もジェンダー倒錯をホモセクシュアリティの兆候と定義し続けた点ではやはり以前の古い解釈に従っていたのである⁽¹⁶⁾。性役割ではなく性的対象の性別を基準としたホモ／ヘテロの二項対立がアメリカ社会に広く普及したのは20世紀半ばになってからのことだったと言えるだろう。

3 近代的セクシュアリティへの「転換」の不完全さ

しかし、2000年代以降の最新の歴史研究の中には、近代的セクシュアリティの展開モデルに大きな修正を求めるような研究が現れてきている。一因となったのは、クイア理論の分野で、フォーコー以降の社会構築主義的歴史観への批判が始まったことであると考えられる。前述したクイア理論家であるセジウィックは『クローゼットの認識論』(1990年)の中で、(ソドミーやジェンダー倒錯などの)複数の前近代的モデルが近代の「ホモセクシュアリティ」という単一のモデルに取って代わられたという見方を否定し、実際には前近代的だとされているモデルは現代にも存続しており、そのことがアイデンティティとしての「ホモセクシュアリティ」に矛盾や非一貫性をもたらしていると論じた⁽¹⁷⁾。こうした議論が生まれた結果、前近代から近代へのいわゆる「転換」についての支配的語りに対する見直しが歴史学研究でも登場するようになった。

従来のアメリカ植民地期研究では、同性間の性行為はまだアイデンティティの構成要素ではなく、コミュニティの規範に従うか逸脱するかどちらかの個別の行動であり、逸脱者は悔い改めることが可能だと考えられていたと論じられることが多かった。これに対し、トマス・フォスターは2006年の著書で異なる立場を取った。フォスターは18世紀のマサチューセッツ州で流通していた様々な言説を検証することで、この時代の性認識は行為とアイデンティティが混ざり合ったものだったと結論づけている。つまり、この時代に特徴的だと考えられている厳格な「行為」モデルとは対照的に、18世紀の植民地アメリカ人たちは習慣的なソドミー——生殖と結婚に基づいた規範的男らしさに反する行為——を人格全体と関連付け、その個人の肉体的・社会的な振る舞いに現れる特性と見なすことがあったとフォスターは主張したのである⁽¹⁸⁾。18世紀における性格や人格の理解が近代的なアイデンティティ概念に相当するかという点には疑問が残るものの、『「行為」対「アイデンティティ」』パラダイムが強調されることによって、植民地期の性理解が現実にはより複雑であったことが見逃されてきたというフォスターの指摘は的を射ていると言える。

一方で、レジーナ・クンツェルによる刑務所についての研究は、近代的な「アイデンティティ」モデルが内包する矛盾を指摘している。クンツェルによると、刑務所という施設はセクシュアリティについての知の生産において重要な役割を果たしてきたが、それは、刑務所でのセックスに関する言説が固定的なホモ／ヘテロの二項対立という近代に特有の「フィクション」を自然化するために用いられてきたからだという。19世紀初めにおける近代的刑務所の成立当初から囚人同

士の性行為は当局者の懸念事項だったが、同性間の性行為に対する認識や具体的な対策は時代ごとに変化を遂げてきた。20世紀初めには、性科学の影響により、囚人間の同性愛行為は刑務所という環境ではなく個人の生物学的・心理学的な要因から起こると理解されるようになり、また、それはその個人のジェンダーへの不順応によって判断できると考えられるようになった。さらに、1940～50年代までには、ジェンダー倒錯ではなく同性への性的欲望に基づいた近代的ホモセクシュアリティの概念が刑務所内での性行為にも適用されるようになった⁽¹⁹⁾。

しかし、刑務所の外では一般的に「正常」、つまり、異性愛者であると考えられている人々が施設内では同性愛行為を行うことがあるように、刑務所でのセックスの実態は、性行為や欲望をアイデンティティの表出であると思えずセクシュアリティ概念の枠内ではしばしば説明できないものだった。20世紀半ばまでに、専門家はこうした施設内での性行為を「状況的ホモセクシュアリティ」と名付け、「真の」ホモセクシュアリティとは区別して理解するようになった。クンツェルによると、この「状況的ホモセクシュアリティ」を刑務所という場に特有のものとして位置づけることは、より広い社会においてもセクシュアリティ概念が不安定であることを認識することから目を背けさせることに役立った。言い換えると、刑務所でのセックスの問題の根本にあるのは、それが対立項であるヘテロセクシュアリティの性質に関して暗に示唆するものにあった。それは、異性愛とは本質的にもろく、不安定で、それ自体「状況的」であるという事実なのである⁽²⁰⁾。

実際のところ、矛盾しているように思われるが、生得的で固定的な性的アイデンティティという概念を作り出した当事者である性科学者や医師もこのカテゴリーの不安定さを認識していた。ドイツ人性科学者リヒャルト・フォン・クラフト＝エビングはヨーロッパの医療化・心理化されたセクシュアリティの言説の生産において主要な役割を担った人物であり、彼の『性的精神病理』の英訳出版は世紀転換期のアメリカでも大きな影響力を持った⁽²¹⁾。彼の理論の中では、同性愛者は自らの生物的性とは反対の倒錯した性質を持って生まれた者であり、また、彼らの同性への欲望は彼らの存在全体に影響を与えるものであると考えられた。しかし同時に、クラフト＝エビングは、寄宿学校や刑務所内、老年期など、ある特定の状況においては他の多くの男性も同性への性的欲望を持つ可能性があるとも述べた。このことからわかるように、生来の同性愛者という新たな概念は、当初から、そうしたカテゴリーは現実にはそれほど生まれつきのものでもなければ不変のものでもないという認識と居心地悪く共存していたのだ⁽²²⁾。

「行為からアイデンティティへ」という性認識の転換が不完全であるのと同様に、性的アイデンティティを判断する基準がジェンダーから性的対象の性別へと転換するプロセスもやはり不完全であり続けている。ジョアン・マイエロウィッツによると、1950年代に入ってもなお、医師や科学者を含めたアメリカ人は、インターセックス（両性の生物学的特徴を生まれながらに併せ持つ者）、同性愛者、トランスセクシュアル（生物学的な性別と性自認の不一致を感じており、さらに性別適合手術で身体的特徴を変えることを望む者）などを区別せず、しばしば混同して考えていたという。しかし、1950年代以降、医師や科学者による学術的議論の結果、それまで一緒にされていた生物学的なセックス、ジェンダー・アイデンティティ、セクシュアリティという概念が明確化され、別個のものとして認識されることにつながった。しかし、マイエロウィッツは同時に、この3つの分析概念が独立したものであるということも社会のすべての人が受け入れたわけではないとも述べている⁽²³⁾。現代のアメリカにおいても、同性愛はジェンダー倒錯と完全には切り離されておらず、ある局面では男らしさや女らしさといったジェンダーの枠組みで理

解され続けているのである。

4 おわりに

本稿で見てきた研究動向を振り返ると、同性間の性行為や欲望に付与される意味が「行為からアイデンティティへ」「転換」したという常套句はいくつかの点で実際に起こったプロセスを見えにくくしているように思われる。第一に、「近代的セクシュアリティ」の形成には、同性間のセックスに付与される意味が行為からアイデンティティへと変化することだけではなく、さらに、その際のホモセクシュアリティの定義が規範的ジェンダーからの逸脱ではなく半永久的な同性への性的指向へと変化することを必要とした。第二に、階級、ジェンダー、人種・エスニシティ、地理等の差異によって、異なるグループのアメリカ人が異なるタイミングでこの新たな性認識に組み込まれた。第一と第二の点をまとめると、近代的な性システムがアメリカ社会全体で共有されるようになるまでには、「転換」という言葉から連想するよりも長い期間をかけた段階的な変化が起こったのである。さらに重要なのは、クィア理論以降の研究が明らかにしたように、過去においても現在においても実際の性行為や欲望は『「行為」対「アイデンティティ」』もしくは『「ジェンダー」対「性的指向」』等の枠組みによって必ずしも明快に整理できるわけではなく、こうした枠組みを無批判に分析に用いることは性認識の歴史を正確に描くことの妨げになる可能性がある。

しかしながら、近代的モデルがそれ以前のモデルを置換したという従来の歴史観の不備を指摘することは、近代的な性カテゴリーが登場したことの歴史的重要性を損なうことにはつながらない。20世紀以降、ホモ／ヘテロセクシュアリティの二項対立という「フィクション」の構築と維持に、国家や各種専門家、および「同性愛者」自身を含む多くの人々が関わったこと、そして、この二項対立が支配的言説としてアメリカ社会に生きる人々に多大な影響を及ぼしてきたことは紛れもない事実なのである。ホモ／ヘテロという近代的カテゴリーの形成がセクシュアリティ理解に重大な変化をもたらしたことを論じることと、こうしたカテゴリーが実際には首尾一貫しておらず常に拮抗するモデルを内包していることを論じることが、クンツェルの研究が示しているように十分に両立するものであると著者は考える。

これらのことから言えるのは、セクシュアリティの歴史についての30年間の積み重ねの結果、私たちはこれまで広く受け入れられ、また、この研究分野の原動力となってきた、「行為からアイデンティティへ」という近代的セクシュアリティ形成の語りを再考し、より複雑な性認識のあり方を描く歴史叙述の方法を模索すべき段階に来たということだろう。

注

- (1) ミシェル・フーコー（渡辺守章訳）『性の歴史Ⅰ—知への意志』新潮社、1986年、56頁。
- (2) ただし、デイヴィッド・M・ハルプリンは、同性間のセックスが近代以前には「行為」としてのみ扱われ、また、近代以降は必ず「アイデンティティ」とみなされるようになったという理解はフーコーの文章の誤読であると論じている。David M. Halperin, "Forgetting Foucault," in *How to Do the History of Homosexuality* (Chicago: The University of Chicago Press, 2002).
- (3) Carroll Smith-Rosenberg, "The Female World of Love and Ritual: Relations between Women in

- Nineteenth-Century America,” *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 1, no. 1 (1975): 1-29; Nancy Cott, *The Bonds of Womanhood: “Woman’s Sphere” in New England, 1780-1835* (New Haven: Yale University Press, 1977).
- (4) Karen V. Hansen, *A Very Social Time: Crafting Community in Antebellum New England* (Berkeley: University of California Press, 1994), 52-78; Karen V. Hansen, “‘No Kisses Is Like Youres’: An Erotic Friendship between Two African-American Women during the Mid-Nineteenth Century,” *Gender & History* 7, no. 2 (August 1995): 153-182.
- (5) Jonathan Ned Katz, *Love Stories: Sex between Men before Homosexuality* (Chicago: The University of Chicago Press, 2001).
- (6) John D’Emilio, *Sexual Politics, Sexual Communities: The Making of a Homosexual Minority in the United States, 1940-1970* (Chicago: The University of Chicago Press, 1983), 9-20.
- (7) George Chauncey, *Gay New York: Gender, Urban Culture, and the Making of the Gay Male World, 1890-1940* (New York: Basic Books, 1994).
- (8) Peter Boag, *Same-Sex Affairs: Constructing and Controlling Homosexuality in the Pacific Northwest* (Berkeley: University of California Press, 2003).
- (9) Boag, *Same-Sex Affairs*; Chauncey, *Gay New York*.
- (10) Eve Kosofsky Sedgwick, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (New York: Columbia University Press, 1985); Judith Butler, *Gender Trouble: Gender and Subversion of Identity* (New York: Routledge, 1990).
- (11) Elizabeth Lapovsky Kennedy and Madeline D. Davis, *Boots of Leather, Slippers of Gold: The History of a Lesbian Community* (New York: Routledge, 1993).
- (12) Margot Canaday, *The Straight State: Sexuality and Citizenship in Twentieth-Century America* (Princeton: Princeton University Press, 2009).
- (13) Rebecca L. Davis, *More Perfect Unions: The American Search for Marital Bliss* (Cambridge: Harvard University Press, 2010).
- (14) David Halperin, “How to Do the History of Male Homosexuality,” *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 6, no.1 (February 2000): 87-123.
- (15) Jonathan Ned Katz, *The Invention of Heterosexuality* (New York: Dutton, 1995), 19-32.
- (16) D’Emilio, *Sexual Politics, Sexual Communities*, 16-17; Martha Vicius, “They Wonder to Which Sex I Belong: The Historical Roots of the Modern Lesbian Identity,” *Feminist Studies* 18, no. 3 (Autumn 1992), 484.
- (17) Eve Kosofsky Sedgwick, *Epistemology of the Closet* (Berkeley: University of California Press, 1990).
- (18) Thomas A. Foster, *Sex and the Eighteenth-Century Man: Massachusetts and the History of Sexuality in America* (Boston: Beacon Press, 2006).
- (19) Regina G. Kunzel, *Criminal Intimacy: Prison and the Uneven History of Modern American Sexuality* (Chicago: University of Chicago Press, 2008).
- (20) Kunzel, *Criminal Intimacy*.
- (21) Katz, *The Invention of Heterosexuality*, 19-32.
- (22) Richard von Krafft-Ebing, “Psychopathia Sexualis,” in *The History of Sexuality in Europe: A Sourcebook and Reader*, ed. Anna Clark (New York: Routledge, 2011), 198-207.

- (23) Joanne Meyerowitz, *How Sex Changed: A History of Transsexuality in the United States* (Cambridge: Harvard University Press, 2002).

[査読を含む審査を経て、2014年10月27日掲載決定]

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程単位修得退学・アラウエア大学大学院歴史学科博士課程)